

今月の逸品

NO. 56 2021. 12~2022. 1



「裁縫雛形 水兵服と被布」

五十川てい (旧姓 沼田) 作

1920年 (大正9年) から
1922年 (大正11年)

〈左〉水兵服 (すいへいふく, 裁縫雛形)
〈右〉被布 (ひふ, 裁縫雛形)

本学教育資料館で所蔵する貴重な教育資料の一つに、大正から昭和戦前期における裁縫教育を知ることのできる裁縫雛形があります。裁縫雛形とは、雛形尺という、現在でいう縮尺定規を用いて作られた実物よりも小さな衣服のことで、裁縫の標本 (お手本) となるものです。裁縫雛形を手本に同じサイズの衣服を作製する縫製教育は、裁縫技術の修得・向上にとっても効果的かつ効率的であることから、広く学校教育に用いられた教育方法でした。なぜなら、衣服を少ない材料でかつ短時間で製作することができるため、より多くの種類の衣服製作に取り組むことが可能としたからです。ここでは、京都府立亀岡高等学校より本学へ寄託され、所蔵することとなった裁縫雛形の中から、五十川てい氏 (旧姓 沼田) が作製した子ども用の水兵服と被布を紹介します。

水兵服は、水兵の制服を真似て作られた洋服のことで、衿幅は肩幅と同じくらいに大きく、衿元はV字で衿後ろは四角く、ゆったりとした寸胴構造が特徴です。雛形の水兵服の上衣は前の紐で結んで着用する構造となっていますので、子どもでも着脱しやすい構造となっています。下衣 (ズボン) も前の紐を結んで胴回りに留めて着用しますが、股割れ構造となっているため、子どもは下衣 (ズボン) を脱ぐことなくトイレを済ませることができるようになっています。被布は、羽織の原型である道服から発展した和装コートで、袖の有るものと無いものがあります。衿が折り返されており、前の総緒で留めて着用する和服です。写真の被布は女兒用で、帯の代わりに紐で留めた着物の上に着用するものです。裁縫雛形に和服とともに洋服があることから、この時期に、人々の日常着が和服から洋服へ移行しつつあることをうかがい知ることができます。

これらは、五十川氏が東京裁縫女学校高等師範科に在学中の1920年から1922年 (18-20歳の時期) に授業課題として製作したのですが、とても丁寧で精巧に作られています。1923年に同校を卒業した五十川氏が裁縫教員としてキャリアをスタートした際、女学校時代に授業課題で作製したものが裁縫雛形として活用されました。このことは、当時の裁縫教育をとおして修得した技術が極めて高かったことを物語っています。

参考文献: 『「装」“よそほひ”の学び—裁縫雛形を通して—』京都教育大学 教育資料館 まなびの森ミュージアム, 2013年11月9日
この寄稿文の執筆にあたり、家政科・教授 井上えり子先生より、貴重な資料とご助言をいただきました。ここに記して謝意を表します。

執筆者: 深沢太香子 (家政科・准教授)

※附属図書館で展示しています。